

(井上専任講師の解説)

こんにちは上田女子短期大学の井上と申します。

上田市在住です。上田女子短期大学で専任講師しております。それから松本大学でも非常勤講師と、日本図書館協会（JLA）で著作権委員をしております。

「これからの公共図書館を担う司書教育のトレンドについて県立図書館の役割、市町村図書館の役割を踏まえて」というテーマをいただきました。

お題いただいて準備し始めましたが、準備するのがとても大変でした。この 1 年でもっとも苦戦したところです。

これは長野県に圧倒的な蓄積、都道府県立図書館サミットや基本計画の策定して今後の方向づけしている。これの蓄積がある中で、私が話題提供をするのは大変だなと思い、いろいろ考えました。館長と職員や協議会メンバーのご尽力の賜物と思っているところです。

司書教育のトレンドという意味で、その話をするにあたって、都道府県立図書館の計画は一通り全部目を通してみました。レジュメには載せてないのですが、こういう点が計画に載っているという点は、今の長野県の議論で相当出てきて検討もされていると思います。専門性を身につけるとか、社会課題に対応しましょうとか、市町村図書館と学校図書館と一緒にやるためのマネジメント、コンサルティング、連携みたいなものが必要とか、地域資源をデジタル化していき、それをさらに使えるようにするキュレーションっていうのも大事です。アウトリーチとしての障害者対応、障害のある当事者が利用できる図書館としている大阪府の例もあります。東京都のように外国語の旅行者がたくさんいるので、外国資料も持ちつという例もあります。

これらについては、長野県で今まで議論されてきたし、取り上げられてきたと思います。検討を通して、もちろん全てはないですけども、県立図書館でも相当サービスとして実装されている。サービスとして実装されているということは、もうかなり人材育成にも結びついている。他の都道府県立図書館を例に、こういうことが必要ですと私がこの話題提供で話しても、どうかと思って、資料（レジュメ）作りを苦戦したところです。

私は、去年 4 月に長野県に移住してきました。県立図書館は、図書館としてすごいと話を聞いていて、実際に訪問する度に、すごいなと思っています。一方で去年 4 月から、県内のいろんな図書館を回っていると、そういう面以外の指摘もあるので、紹介しようと思います。また、前職で 21 年勤めた国立国会図書館（NDL）の議論っていうのも、もしかしたら何か補助的に参考になるかなと感じています。NDL は今でこそ、色々な人に「使っているよ」とか「頑張ってるね」とか「いいサービスをしている」と言われるのですが、20 年前は、そんなに評価は高くなかったと思います。唯一の国立図書館ですが、その当時は「永田町立図書館」とか、サービスも全然いまいちと言われていました。私が NDL に入った頃はまだそういうふうな状況でした。最近は評判もよく、いい国立図書館になったね、と言われ

ます。今後の県立図書館がさらに発展するヒントがあるかもしれないということを紹介していければと思います。

まず、司書といういろいろな意味があります。司書資格を持っている図書館員と図書館職員といわれる職員のこと。長野県の公共図書館員に 900 人くらいいます。

最近の図書館には、色々な人がいます。必ずしも公務員だけでなく、常勤職員もいれば、司書職もいれば、行政職のジョブローテーションで来る人、非常勤職員も最前線で頑張ってくださっています。会計年度職員もいるし、臨時的任用の職員もいます。委託して指定管理を受託する会社の社員や職員も、もちろん司書として我々の仲間である。採用条件を見ると、非常勤であったりパートであったり、様々な雇用体系があります。そういった状況でどういうふうに司書教育やっていくかということが、今日のいただいたテーマかと思っています。

公共図書館というふうにタイトルをつけていますが、公共図書館は公立図書館と私立図書館を合わせたもので、日本は大半が公立図書館です。

長野県は 77 自治体のうち 56 で公立図書館が設置され、大体 20% ぐらいが未設置です。長野県には 70 の公立図書館がありまして、複数を抱える図書館もあるため、図書館数と自治体数は一致しない。私立図書館が 1 つあります。その他の館種としては学校図書館があります。大学も図書館を必ず置いています。専門図書館、それから NDL というのがあります。

どんなことを司書教育でやっているか。司書になる前に、司書資格を取ってきている人が多い。司書になる時は採用試験を受け、採用になった後は、様々なトレーニング教育を受けます。司書資格は毎年 1 万人近くの人取得します。資格はこの表の通り、基礎科目の他に図書館サービスに関する科目、図書館情報資源と選択科目あります。生涯教育における図書館の位置づけ、情報技術、経営、サービス、情報資源について学んでいます。図書館の専門的な仕事をしている人は、おそらく数万人なので毎年 1 万人いる資格取得者は、必ずしも職業に結びついてない。以前は図書館司書になりにくかったけれども、最近は倍率が緩和されてきたと言われています。授業は 14 単位以上ですのでそれなりに努力すれば取得できる。長野県では図書館スタッフの約半分ぐらいは司書資格持っていません。司書資格を持っていないくて、行政職からジョブプロテーションで入ってくる人もいますので、必ずしも皆が持っていないためです。いろんな採用試験があります。専門職の司書もいれば、行政職で入って税務、観光、市民サービスを異動する中で図書館に配属されたという人もいます。それから非常勤職員、図書館に働いているパート、アルバイトとして、図書館に尽力していただいているという職員もおります。受託事業者の場合は、会社員や NPO の職員の場合もあり、公務員以外の方もいらっしゃいます。

図書館の話では司書資格もさることながら、専門職採用するときには選抜されている話もありますが、私はそうでもないのではないかと思います。いろんな採用があるので、そ

の選抜のタイミングでも、いろんな背景や能力を持った方が一つの現場で働いてくださっています。試験も様々です。専門職採用は専門試験と面接だったり、行政職の方は行政に関する適性試験も行われて、ほぼ面接も実施しています。非常勤職員も面接や試験などいろんな試験があります。会社員は様々ですけど適性試験と面接というふうに、ここでも選抜されています。採用は結構いろんな入口があるから選抜の仕方も様々で、図書館職員皆さんはいろんな形で採用されています。だから司書資格を持っていない人もいるし、いろんな形で司書になるから、司書になってからの研修が大事ということになります。

その中でどのように司書教育や図書館員としてキャリアを積んでいるのか。図書館で研修を受ける場合、大小の図書館によって司書教育も様々です。大きい図書館は、サービスも選書もいろんな仕事があるので、実務が一番大事。OJTと言われるほど体系化されているわけでない場合も多いが、実務で得られているものは大きいでしょう。

業務上の研修というのも非常に大事です。それから自己研鑽も。図書館員は、自己研鑽が好きだと言われています。図書館以外に異動する人もたくさんいて、その中で別の業務や研修を通じて学ぶことも多い。

司書になった後の司書のスキルについて。運営もするし、収集整理もするし、選書もあるし、サービス一般もするし、障害者向けサービスもするし、イベント企画、読み聞かせから、ゲームをやっているところも含めて、様々な企画をしています。図書館館運営もあるし、自治体の図書館だと、予算獲得のために役所の別部門とやり取りもします。最近では、図書館システムがない図書館はないくらいで、しかも多額のお金を支払っているのでシステムの知識も必要です。接客や接遇も大事です。それから地域に根ざした地域資源や地域コミュニティに関するスキルも大事です。情報収集を通じて、最近どんなふうに地域が困っているのだろうかというような、情報収集のスキルもいる。図書館と図書館の連携もしています。博物館や美術館とか学校とかいろいろなところと連携しています。その連携のためのスキルも大事です。いろんな場所で複数のスキルを活用しながら頑張っています。1日7時間から8時間、こんな実務をやるわけで、実務を通じていろんな技能を身につけていく。

さらにいえば、司書の専門ももちろん大事だし、図書館で勤務をする非専門の方もいらっしゃいます。大きい図書館なら、経理をしてくれる人もいれば、システムだけやってくれている人もいるし、それから施設を見てくれている人もいるし、いろんな人がたくさん働いています。必ずしもその司書の教育とは結びつかないけど、そういった方もいます。

研修も豊富です。例えば、県立図書館の市町村立図書館向けの研修、サービス計画、デジタル活用、学びのプログラムとか、長野県図書館協会も著作権の研修や、読み聞かせの研修をしています。県立図書館は、地域研修を北信でしており、資料保存がテーマでした。市町村立図書館で著作権や読み聞かせもされていると思います。国の方だと文部科学省やNDLによる研修もあります。新任館長の研修を受けたり、主題だったり資料保存だったりの研修があります。こういったものを選択して研修を受けて、図書館員としてキャリアを積んでいく。

それと日本図書館協会（JLA）の、例えば中堅ステップアップ研修は、3年目以上や7年目以上を対象に開講している。7年目以上では経営とか運営とかそういった研修がされています。他に、認定司書制度というのもあります。10年以上の勤務経験がある資格を持った職員が自己研鑽した場合に認定書の発行もしていて認定される。図書館員としてのキャリアスタートから3年とか7年とか10年とか自分のキャリアを上げていくのにしたがっていろんな研修が用意されています。

公務員や社員といった組織の構成員としての研修もちろんあります。特に公務員だと、官房や組織運営の研修もあります。組織外の研究会、職能団体などを通して自己研鑽もやっています。けれど、司書として長く勤務できることは、そう多くはない、結構、異動していきます。私も20年くらいのNDLにいましたが、10年ぐらいは官房やシステムをしていたので、いわゆる図書館司書としての仕事は半分ぐらいしかやっていません。司書以外の異動もあるが、ネガティブなことだけじゃなくて、別の業務や自己研鑽を通して学ぶことも多い。こんな感じで司書教育は、いろんなチャンネルで行なわれています。

地域社会や図書館のような文化機関などの維持に課題が生じている。人口減も全国で始まっていますが、長野県はもう20年前以上から人口減が始まっています。ここから25年で長野市が一つなくなるぐらいの人口減が長野県が起きる。書店も減少している。ピークは25000店と言われますが、現在全国で1万、稼働しているところは8000という話もあって、3分の1ぐらいになっている。20年前を起点にしても、もう半分強6割ぐらい減少しています。大きい書店は増えているという話もありましたが、昔に比べ総坪数は増えているが、それも2010年をピークに総坪数も減少し書店のスペースも減ってきています。自治体の4分の1にも書店がないと言われていました。長野県は自治体の半分に書店がないが、そもそも自治体の総数が多く、マルマル町村に書店ないけれども近くの市に書店があるからそっちにいてという人もいます。こういったインフラが減っている、書店はもちろんあってほしいが、実際に書店がなくなっているということは、ますます図書館が大事になってくるとのことだと思います。

文化施設も維持しにくくなってくるのは、ほぼ疑いのないところだと思います。図書館、博物館、美術館の閉館や縮小は、まだそんなに表になってないけれど、今後はあると思われます。長野県の博物館、美術館は341館の全国1位ですが、例えば閉館するものも出てきています。今後連携して機能縮小しつつ一緒にやっていこうとか、そういったことも避けられないような状況で今後の課題だと思います。

では、県立図書館と市町村立図書館、役割とは。図書館の役割は様々議論されていますが、最近では、情報提供、資料保存、利用者からの自己教育のための自分でも学べることをサポート、読書施設などが挙げられます。そこから文化創造していきましょう。こういったことを図書館では目的としているし、機能としていっていると思います。では県立図書館の役割ってどの辺にあるのか。もちろん直接サービスも大事です。県内の図書館、社会教育施設、学校との

ネットワーク運営も大事です。市町村立図書館の運営、サービスの相談、つまりコンサルティングということも、以前から言われており、都道府県図書館でも実際に取り組みが進んでいるところですよ。研修もやってきました。市町村図書館が、その講師が務まる人が館内にいないよと言ったときに、県立図書館職員やそのネットワークで読んできた人が研修をしてくれるっていうのは非常に助かっている。共通サービスとしては、紙資源の相互貸出で、市町村立図書館も含め、その取りまとめもしている。電子資源の共同利用については、特に長野県はそういったものも先進県の一つです。横断検索も非常に大事で、県立長野は、最近カーリルと協力されていたりして、検索して書籍がどこにあるか分かりやすくしようと取組んでいる。県立図書館のこういったものを調べていると、本当に取り組みが進んでいる。県立図書館のミッション、ビジョンを見ると、行動指針に書いてあります。市町村や公共機関の取り組みを下支えし、展開します。自分たちでは先進的なサービスを実験、実践します。

本当に実験、実践している。「人々とともに成長して変化に強い図書館作りに挑戦しつづけます」と言っている。概要にもそれらの県立図書館としての役割を記載している、市町村立図書館だけでなく文化施設、教育機関、さらに全ての人々って書いてあるが、普通は他の計画見てもなかなか書かないしここまで書いているのは珍しい。それから e-Library、デジタル化・ネットワーク化も非常に大事なところで、もう具体的になっていますよということでナレッジスクエア、デジとしょ信州の電子書籍サービスというのが実施されていあす。コンサルティングも行われていまして、いろんな地域で市町村立図書館運営の助言を実施している。

冒頭申し上げた、これからの公共図書館を担う司書教育ということで県立図書館長の役割と市町村図書館の役割を踏まえて、お話ししたところです。

私は、1年半前までは長野県の外に住んでいました。都道府県立図書館の中でも県立長野図書館はフロントランナーの一つ。長野県に転職して来た4月に、授業も忙しかったが、県立図書館を見ておきたいと思い、森館長にご案内いただきました。すごいと思って感動して、その後も時々利用者としてこっそり行っています。一方で、1年半の間に、県内のいろんな地域の図書館をたくさん回り、地域から聞かされたところもある。違う意見もありました。

例えば、長野県は南北に長い、長野市に県立図書館がある。北信は県立図書館の直接サービスが受けられるが、うちみたい離れている地域では、県立図書館のサービスとか受けられないとの話を聞いたり、例えば横断検索っていうのは、各都道府県では県が持っていること多いけども、長野県は地域ごとに横断検索をやった。詳しく聞くと県立が過去に検索をやっていなかったの、自分たちがやむを得ずやった。2023年に各地域を回っていると聞こえてきたり、BMも本当は県がやって欲しかったけど地域でやっているなど、北信から離れれば離れるほど、自分たちで何とかしなきゃってことで、市町村図書館が県立図書館みたいな働きをやっているという話を聞いたりした。でも一方で、今年になるとその評判が変わってきて、やっぱり県立っていいなっていうふうに言っている館も出てきています。

ここでNDLの紹介をしたいと思います。NDL職員は900人と大きい図書館です。さら

に非常勤職員、事業者さんもいて、実際働いている職員は、東京本館、関西館、上野の国際こども図書館を入れて、おそらく 1500 以上になると思います。昔は、近くの人たちしか図書館サービスやってないから意味ない、国立なのに、と言われていました。最近は国立図書館としておそらく認知されているし図書館以外の人も、国立国会図書館って聞いたことあるってということで、かなり周知されてきている。20 年前の私が入ったときは、まだ永田町立図書館とかいうふう言われていました。この当時、ゆにかねっと（国立国会図書館総合目録ネットワーク）を紹介しに行ったときに、国立情報学研究所（NII）で同じようなことをやっているのに、NDL でなんでやるの？と言われてたこともありました。後追いと思われたのかもしれません。

昔から NDL は国の図書館として「図書館の図書館」の役割をやっていたのですが、存在感は薄かった。最近良くなってきたかなと思うきっかけは、サービスと情報発信がオンラインサービスとしてできてきたからだと思っています。NDL デジタルコレクションで資料が見れるようになったし、NDL サーチも使いやすくなった。レファレンス協同データベース、リサーチナビも、各館のレファレンス業務の中に組み込まれるようになってきた。一般の人たちも使うようになってきて、NDL って悪くないといって評判になってきた。それから、カレントアウェアネスっていうのは図書館や図書館学の情報を毎日更新しているサイトがあります。長野県でも講演されたことある福島幸宏先生は、図書館員だったら目を覚ましたら、朝これを見てから仕事して下さい、と言っているくらい、よくまとまっているサイトがあります。こういうサービスを通じて、一般の方や図書館員の方に評価をしていただけてきたのかなと思いました。

普段使いのサービスを通じて、「北信の図書館」から脱曲する一つのきっかけになるのかなと思う。デジとしょ信州はすごくよく使われていると思う。都道府県図書館、市町村図書館の計画を比べた時に、しばしば指摘されるところで、都道府県図書館の計画には市町村に支援しますって書いてあるけど、市町村立図書館の方の計画に県立図書館が出てこない。他の自治体でも、よくあると言われていて。実際私も相当数見ましたがあんまり書いてない。県立長野図書館に関しては、少なくとも去年今年からは、県立図書館のオンラインサービスの現状が記載されて、市町村の計画に検討が登場している。それは、すごくいいことだし、やってこられたことがすごく大事だなと思います。

県立図書館として、どんなことを司書教育の中でやってほしいのか。オンラインサービスについて、先ほど森館長から紹介していただいた通り、私井上はオンラインサービスを 7 年ぐらいやってきて、オンラインサービスに関するスキルも身に付けられたし、いろんな人的ネットワークも作れた。鳥取県立図書館の計画にも載っていますが、県内図書館全体のサービスや取り組みを順次実施する。ジョブローテーションを通じて専門性を身につける。県立図書館らしくいろんな人を巻き込む仕事を通じて、いろいろ身に付くことがある。つまり、システムや連携に関する業務を順次配置されることが、司書教育にとって大事なのだと思う。

調査・研究については、「これからのあり方検討協力者会議」の中に都道府県立図書館の業務としての記載がある。調査・研究は、なかなか市町村立図書館ではできない場合に、県立図書館に詳しい人がいるとか言われると、尋ねやすいのではないか。図書館員はいろんな専門性を持っている人がいる。とはいえ、普段の仕事の中のみで専門性を身に着けるのは大変です。目の前の仕事をしなきゃいけないから、NDLであってもみんながみんな専門性高いわけではない。地域や長野県とかに関わる専門性、マニアックなことと言い換えてもよいが、0.5歩先くらいのことを県立図書館が持っていて欲しい。その中で、新しいサービスも出来上がっていくのではないか。ゲリラ的に生まれるサービスもある。例えば長野県の歴史に詳しいとかもいいし、長野県の役所のことに詳しいでもいいし、長野県の文化施設にやたら詳しいとかでもいいし、あと近くの図書館、例えば新潟県の図書館に詳しいとかでもいいので、専門的なこと少し特殊なことを押さえておいてもらえると、図書館が新しいサービスとか新しい取り組みをしたいと思ったときに、参考になる。これがうまく機能する場合もあれば、趣味で終わるかもしれないけど、そういう方が県立図書館にいられるようにしてくれたら嬉しい。

私から以上となります。ご清聴いただきまして誠にありがとうございました。